

# 鍾山書院を中心とした姚門の文学活動について

浅井邦昭

## はじめに

乾隆四十一年（一七七六）、四十六歳になった姚鼐は、朱孝純の招きに応じて、揚州の梅花書院で講学活動を始めた。鄭福照『姚惜抱先生年譜』によれば、彼は揚州に足かけ三年滞在し、一旦は帰郷する。しかし、すぐに安慶の敬敷書院で活動を再開し、八年を経て歙縣の紫陽書院に移ると、ほどなくして活動の拠点を江寧の鍾山書院に定めたのである。

彼の鍾山書院での活動は、二期に分けられる。第一期は乾隆五十五年（一七九〇）から嘉慶六年（一八〇一）の初めまでとする。その後、老齢のため敬敷書院に戻ったものの、しばらくして鍾山書院に復帰する。第二期は嘉慶十年（一八〇五）から、歿年の嘉慶二十年（一八一五）までとし、合計すると、鍾山書院で二十年以上教えている。彼の名声が高まると、その名を慕って、多くの後進が入門を志願してきた。入門を許された弟子は、「姚門」と呼ばれる文学集団を形成する。彼らを中核として、桐城派が形成されていったのである。

ただし、研究者の関心は一部の弟子にとどまり、現在も姚門の具体像は明らかにできていない<sup>二</sup>。そこで、本稿では、姚門の文学活動を論じることとする。まずは、主な弟子の交遊から、姚門としての結びつきを見ていく。その上で、姚鼐に最も長く師事した陳兆麒に注目する。彼の『蘭軒文集』は、姚門の批評を多く収録しており、その文学主張

の一端をうかがうことができる。陳兆麒の著作から、姚門という文学集団の性格を明らかにしてみたい<sup>三</sup>。

## 一、姚門と主な弟子について

姚門の文学活動を論じる前に、まず姚門がどんな集団か確認しておく必要がある。そこで、本章では、姚門を概観し、本稿で取りあげる弟子について見ておく。

姚門の規模については、方宗誠「劉孟塗先生墓表」（『柏堂集前編』卷十）で「姚先生の門に、詩古文を攻むる者數十人あり（姚先生之門、攻詩古文者數十人）」というように、当時から数十人規模と見なされていた。劉聲木『桐城文學淵源考』も、姚鼐に師事した弟子として、四十二人を挙げており、方宗誠の記述を裏づける。ただし、未収録の弟子も多くいるため、その規模はさらに大きい可能性もある。実際には、同門の弟子でも親疎が見られるが、姚鼐の講学活動によって、姚門という大きな文学集団が生まれたといえるのである。

ただし、弟子といっても、その位置づけは一樣でない。姚瑩は『姚氏先德傳』卷四において、姚鼐の弟子として十四人を挙げている。具体的には、管同、梅曾亮、方東樹、劉開を著名な弟子とし、鮑桂星、陳用光、鄧廷楨を栄達した弟子とする。次に私淑の弟子として、吳徳旋、姚椿、毛嶽生、張聰咸を挙げるため、鄧廷楨までの七人は著籍の

弟子と見なしたことがわかる。ほかに、姚鼐が会試同考官として及第させた周興岱、錢澧、孔廣森も挙げており、同じ弟子でも師事した経緯によって、いくつかに分けられている。ただし、劉聲木などは吳徳旋らも弟子としており、これまで著籍と私淑を区別せず、すべて同門と見なしてきた。私淑の弟子も姚門に数えることで、その影響力は一層高く見積もられるようになったのである。

弟子のなかでは、「姚門四傑」が特別視されてきた。姚鼐「惜抱先生與管異之書跋」〔東溟文後集〕卷十〕が「當時、異之、梅伯言、方植之、劉孟塗と姚門の四傑と稱せらる（當時、異之與梅伯言、方植之、劉孟塗稱姚門四傑）。」として、管同、梅曾亮、方東樹、劉開を挙げたのが、初出とされる。ほかに、曾國藩「歐陽生文集序」〔曾文正公文集〕卷一〕のように、劉開にかえて姚鼐を加える場合もある。その後、多少の出入りはあるものの、従来の論考では、彼らを姚門の代表と見なしてきた。

ただし、彼らのみを姚門の代表とするのは、さらに検討が必要である。なぜなら姚鼐は「感懷雜詩」〔後湘二集〕卷四〕において、姚門を次のようにうたうからである。

海内の文章に惜翁有り	海内文章有惜翁
新城の學士 宗風を得	新城學士得宗風
方劉梅管均しく畏るるに堪へ	方劉梅管均堪畏
輸り家鷄を卻くるは是れ阿蒙	輸卻家鷄是阿蒙

この詩では、まず文壇の領袖となった姚鼐から始める。その衣鉢は陳用光に伝えられ、さらに四傑のような畏敬すべき弟子がいると続ける。最後には、彼らに比べ自分が家学を継承できない未熟者であることを恥じるが、姚鼐はここで姚鼐、陳用光、四傑という姚門の序列を

示している。この詩には注があり、そこには彼の作詩の意図が示されている。

陳石士閣學、詩文醇雅にして、惜翁の正傳を得。然るに閣學殊に上元の管異之同を推し、諸れを六祖に比へて、自らは秀上座に居る。余謂へらく吾が桐の方植之東樹、劉孟塗開、上元の梅伯言曾亮及び異之の若きは、皆な惜翁の高足にして、四傑と稱すべし。未だ閣學の何如に謂ふかを知らざるなり。

陳用光が師の正統を得たということから、姚門では彼を姚鼐の後継者と見なしたことがわかる。さらに、彼が管同を六祖慧能にたとえ自分を神秀になぞらえたのは、陳用光が後継者の地位を管同に譲ろうとしたことを示している。最後まで、姚鼐は陳用光の意向を気にするが、本来は後継者が優れた弟子を選定すべきと考えるからである。この注からは、四傑という呼称が、陳用光を別格として生まれたものであることがわかる。前出「惜抱先生與管異之書跋」では、管同だけを取り上げるため、陳用光に言及しない。後世は、この跋に基づいて姚門の序列を論じるため、陳用光が後継者である前提が看過されてきたのである。その結果として、現在も彼に関する論考は、四傑や姚鼐に及ばない<sup>五</sup>。しかし、当時の認識に基づけば、姚門は陳用光を中心として論じるべきなのである。

本章では、姚門の概要を見てきた。数多くの弟子のなかで、姚鼐は陳用光こそ師の後継者と見なしていた。つまり、姚門で頭角を現すには、姚鼐だけでなく、陳用光の意向も重要だったのである。陳用光と四傑は、いずれも鍾山書院時代の弟子である。そこで、次章以降は、鍾山書院での交遊を中心にして、弟子同士の結びつきを論じていく。

## 二、姚門における陳用光の地位

本章では、陳用光を取りあげるが、まず姚鼐との師弟関係を論じる。その上で、彼がなぜ姚門で後継者と見なされたかを考察し、彼の姚門に対する貢献を明らかにしていく。

陳用光の入門時期について、その「姚先生行狀」(『太乙舟文集』卷三)には「用光 庚戌の歳に先生を鍾山書院に謁してより、癸丑に及ぶまで、業を鍾山に受くるは、八たび月を閲る。後歳より書を以て問ひ業辱を請ふ(用光自庚戌歲謁先生於鍾山書院、及癸丑、受業於鍾山者、八閱月。自後歲以書問請業辱。)」とある。彼は姚鼐が鍾山書院に赴した乾隆五十五年(一八〇一)には進士に及第して、その後、鍾山書院を離れ、嘉慶六年(一八〇一)には進士に及第している。官僚となった彼は、姚鼐のもとを離れてからも、書簡を通じて教えを受け続けた。『惜抱先生尺牘』は陳用光にあてた一通以上の書簡を収録し、『太乙舟文集』は姚鼐にあてた十二通を収録している。ここから、ふたりが書簡を通じて、姚鼐の死まで密接な師弟関係を維持したことがわかるのである。

師の陳用光に対する評価は、「與朱石君」(『惜抱先生尺牘』卷一七葉裏)に見える。ここでは「其の人 古文を爲るを學びて、已に塗轍を得て、其の至る所を極むれば、以て前賢に追配するに足る。而も行誼學識、端正にして規矩有り(其人學爲古文、已得塗轍、極其所至、足以追配前賢。而行誼學識、端正有規矩。)」といい、いずれ古文を究めれば先賢に匹敵するだろうと称揚し、品行から学識に至るまで、その人となりに高い評価を与えている。ほかにも「與魯山木」(『惜抱先生尺牘』卷二 三葉裏)では、陳用光を骨肉の如しといっており、彼を肉親同様に扱っている。このように、入門当初から、彼は姚鼐にその将来を強く期待されていたことがわかるのである。

一方、陳用光もまた師の期待に応えようとした。「寄姚先生書」

『太乙舟文集』卷五)第一通には、その決意が表明されている。

顧るに嘗て先生の用光に期する所の者を念へば、學ぶに夫の道を致すを以てすればなり。古へより師弟子の相ひ授受するは、固より親炙を貴ぶ。而れども其の傳の能く習ふと否とは、必ず其の人の自ら力むるを視る。苟し終日側らに待すも、志氣従はざれば、則ち其の未だ焉こに待さざるが如きのみ。用光曩者江寧に在る時は是れなり。苟し千里阻隔すれども、師説に服膺して懈らざれば、則ち其の日び焉こに待するが如きのみ。而れども用光今者能はず。

ここでは、かつて鍾山書院で親炙する機会を得ながら、自分の努力が足りなかったことを告白している。遠く離れた現在、以前にまして師の教えに服膺することで、彼は鍾山書院のころと同じように教えを守ろうとする。彼は鍾山書院を離れてからも、師に尊崇の念を抱き、忠実な弟子であり続ける決意を示したのである。ここでは、その決意を実現できていないと反省するが、実際には、彼はその後も一貫して姚鼐の教えを守っていく。その結果として、陳用光は師の後継者と見なされていくのである。

姚鼐だけでなく、ほかの弟子も、陳用光を後継者と見なしていた。例えば、李宗傳は「再答陳碩士編脩書」(『寄鴻堂文集』卷一)で「閣下 近人の病無きは、是れ眞に能く吾が師の法を守る者なり。計るに今ま吾が師の望みに副ふに足る者は、閣下を舍いて其れ誰なるか(閣下無近人之病、是眞能守吾師之法者也。計今足副吾師之望者、舍閣下其誰哉。)」といい、彼を師の教えを忠実に守り、その期待に応えるだけの資質を備えていると評価している。ここには、姚鼐と陳用光の特別な師弟関係が、姚門のなかで共有されていたことが示されている。

師友からだけでなく、当時の社会からも、陳用光は高い評価を受けていた。梅曾亮「陳石士先生授經圖記」（『柏硯山房文集』卷十）も、彼が皇帝から信任を得るだけでなく、後進を扶助し慕われたとしている。その温厚な性格もあって、身分の上下を問わず、彼は広く社会から信頼を得ている。信頼を得た理由として、梅曾亮は彼が姚鼐の教えを忠実に守ったことを挙げている。彼の社会的評価も、姚鼐の後継者であることが重んじられたのである。ここから、姚鼐の死後、陳用光が姚門の代表であることは、社会に広く認知されていたことがわかる。それだけでなく、陳用光は自らの影響力を、ほかの弟子を引ききたることに発揮している。呂璜「禮部侍郎江西新城陳公墓誌銘」（『月滄文集』卷六）には、同門に対する援助が記されている。

上元の管同、古文を能くし、姚郎中の高第の弟子爲るも、久しく落解す。公の江南に試みるを典るに及んで、同式に中る。宜興の吳徳旋、嘗て古文の法を姚郎中より受け、而も其の文儼然として以て自成するもの有るも、既に老ゆ。公之れを延きて浙江學使の幕に入らしめ、與に作る所を商訂す。或ひは塗乙する所有るも、乃ち益ます歡ぶ。京師に居りて、後進小生、文藝を以て質すに就けば、必ず意を褒めて之れを誘進す。或ひは衆に游揚して口を容れず。客至れば、詩を賦し奕棋し對談すること、常に日を竟へて倦まず。

陳用光は江南郷試の考官として、管同を抜擢した。また、浙江學政に着任した際には、吳徳旋らを幕僚として招いている。ほかにも方東樹を塾師として自邸に寄寓させたこともあり、同門の弟子に対して、さまざまな便宜を図っている。また、彼の交遊の広さは、学術だけでなく、遊戯にまで及んだ。彼が京師の人々と積極的に交遊を結んだこ

とで、姚鼐の死後も、姚門の名声が衰えることはなかった。このように、自分だけでなく、同門を引き立てることで、彼は姚門を隆盛に導いたのである。

ここまで、陳用光の姚門における地位を見てきた。彼は姚鼐から将来を期待され、その後は一貫して師の教えを忠実に守り続けている。また、自ら榮達するだけでなく、同門に対しても便宜を図ることで、姚門に大きな貢献をしている。彼は文学的な成果を得るだけでなく、社会的な成功も加わって、姚鼐の後継者として公認されるようになったのである。

### 三、鍾山書院における四傑

姚門において、陳用光に次ぐ弟子が四傑である。彼らは姚鼐や陳用光から賞賛されることで、その地位を確立していった。そこで、本章では、鍾山書院を中心にして、彼らの交遊を論じることにする。

四傑のうち、方東樹と劉開は姚鼐と同郷である。「與胡雒君」（『惜抱先生尺牘』卷三 九葉表）において、姚鼐は「孔城の劉生、名は開。十九歳にして、吾れ呼びて書院に來りて書を讀ましむ。故郷の讀書種子、異日或ひは方植之及び此の人に在るならん（孔城劉生、名開。十九歳、吾呼來書院讀書。故郷讀書種子、異日或在方植之及此人也）。」<sup>九</sup> というように、同郷のふたりに對する期待を示している。陳用光に對しても、彼はふたりの近況をたびたび報告しており、姚鼐と陳用光ともに、常にその生活に関心を持っていたことがうかがわれる。<sup>十</sup>

ふたりのうち、方東樹の入門が先である。鄭福照『方儀衛先生年譜』は、彼の入門を乾隆五十八年（一七九三）とする。その後、嘉慶四年（一七九九）には、彼は塾師として陳用光の屋敷に招かれている。さらに嘉慶十二年（一八〇七）には、姚鼐から孫の教育を任される。「與陳碩士」（『惜抱先生尺牘』卷六 十七葉裏）において、姚鼐は

「吾れ今年方植之を邀き來りて孫に課して文を學ばしむ。書院の中略や談すべき者は、惟だ此れのみ（吾今年邀方植之來課孫學文。書院中略可談者、惟此耳）」といい、鍾山書院で議論するに足る弟子は、方東樹だけという。その才能を重んじるからこそ、姚鼐や陳用光は、彼に便宜を図り、子弟の教育を任せたのである。ふたりがこのように重んじたことよって、方東樹は諸生でありながら、姚門で高く評価されるようになった。

劉開の場合、前出「與胡雒君」は、嘉慶七年（一八〇二）に十九歳で書院に呼び寄せられたという。一方で、陳方海「劉孟塗傳」（『劉孟塗集前集』巻末）は、彼が十四歳で入門し、姚鼐に将来を囑望されたと記している。その場合は、嘉慶二年（一七九七）の入門になる。前者ならば、敬敷書院に移ってからになるが、後者ならば、入門は鍾山書院の第一期までさかのぼる。ただし、彼は入門以降も、職を求めて各地を遍歴し、鍾山書院で姚鼐に親炙した機会は、それほど多くない。その点では、師に長く仕えたほかの三人とは、位置づけがやや異なっているのである。

彼の陳用光との交遊は、嘉慶八年（一八〇三）に始まる。「送劉孟塗南歸序」（『太乙舟文集』巻七）によれば、この年、陳用光が姚鼐を訪れると、折悪しく不在であったが、劉開とは会うことができた。そのときの様子を「孟塗に見え留まること數日にして、縦に古今を論ずれば、意氣偉然として畏るべし（見孟塗留數日、縦に古今を論然可畏）」と伝え、彼は劉開の意氣盛んなことに感歎している。わずかな時間ながら、陳用光は強い印象を受け、劉開も引き立てたいと思うようになる。そのことは「與管異之書」（『太乙舟文集』巻五）に、次のように見える。

曩者、惜抱先生亟ば足下の才を稱するも、用光見えんことを願

ふの思ひを蓄ふるは、茲こに十年なり。兩たび江寧を過るも、皆な相ひ値はず。今夏、劉明東此こに來たり、順天試に應ず。意らく明東、北に擧げられ、而も足下、南に擧げらるるは、固より人間に喜ぶべき事か。

ここでは、劉開と管同がともに郷試に合格できるよう期待している。ふたりの才能を同等と見なしたからである。前章で見たように、後に陳用光は管同を拳人に抜擢している。実現はしなかったものの、彼は劉開も成功してほしいと願ったのである。このように、劉開もまた姚鼐と陳用光から賞賛を受けたことで、姚門での地位を固めたと考えられる。

次に管同について見ていく。「與陳碩士」（『惜抱先生尺牘』巻六十四葉表）には「近ごろ江寧に管同なる秀才有り。其の古文殊に筆力有れども、其の人貧きこと甚しく、河南に在りて館に作す。數文を寄せ來れば、今時の中に希に見る所なり。其の年廿六なれば、異日の成就未だ量るべからざるのみ（近江寧有管同秀才、其古文殊有筆力、其人貧甚、在河南作館。寄數文來、今時中所希見。其年廿六、異日成就未可量耳）」とあり、姚鼐は嘉慶十一年（一八〇六）に陳用光に彼を紹介している。そのため、管同の入門は鍾山書院の第二期と考えられる。これ以後、彼は師の側らで学び、劉聲木からは最も長く仕えた弟子と評されることになる。

管同については、姚鼐はわざわざほかの弟子に、その面倒を見るよう依頼している。例えば、「與鮑雙五」（『惜抱先生尺牘』巻四 十三葉裏）では「此の生詩文俱に佳く、乃ち少年の異才なり。若し行部して至らば、呼びて與に語るべく、或ひは便ち招きて幕に入るも、亦た佳き事ならん（此生詩文俱佳、乃少年異才。若行部至、可呼與語、或便招入幕、亦佳事也）」として、管同を異才と賞賛し、鮑桂星に彼

と会い幕僚として招くよう要請している。これらの書簡からもわかるように、陳用光や鮑桂星は、まず師の賞賛によって、管同の名を知っている。前出「與管異之書」では、陳用光が鍾山書院を訪ねても、管同と十年も会えない状態が続いたという。面識はなくても、その評判を聞くことで、彼らは管同に対して同門意識を抱くようになったのである。このように、姚門では、面識の有無は関係なく、師の紹介により、弟子同士が同門意識で強く結びつくようになった。その結びつきにより、管同は道光五年（一八二五）に陳用光から抜擢され、挙人になったのである。

最後に、梅曾亮を取りあげる。吳常燾「梅郎中年譜」（『國專月刊』第四卷第一号）は、その入門を嘉慶十年（一八〇五）とする。姚鼐は「與吳山尊」（『惜抱先生尺牘』卷二 四葉裏）において「鍾山書院の諸生 時文を作るに差や観るべき者は、固より尚ほ人有り。若し詩を作れば則ち梅總憲の一曾孫 曾蔭と名ある者もて佳と爲す。古文を作れば則ち管同なる者有りて佳と爲す。此の二人年僅か二十許りにして、若し年進みて學登らば、後來の雋と爲らん（鍾山書院諸生作時文差可觀者、固尚有人。若作詩則梅總憲一曾孫名曾蔭者爲佳。作古文則有管同者爲佳。此二人年僅二十許、若年進學登、爲後來之雋矣。）」という。「曾蔭」は梅曾亮の原名である。ここでは、梅曾亮の詩と管同の文を第一に推しており、彼は入門当初から、管同とともに将来を嘱望されていたことがわかる。その後も、ふたりは師の側らで学びつけ、第二期における代表的な弟子となるのである。

陳用光もまた梅曾亮を高く評価している。「再與呂禮北書」（『太乙舟文集』卷五）において、彼は「姫傳先生の門人に、管異之同、梅葛君曾亮有り。皆な深く造り得ること有るは用光より勝れり。惜むらくは異之今年の秋病歿せり。葛君は則ち年齒甚だ壯にして、精進すること未だ量るべからず（姫傳先生之門人、有管異之同、梅葛君曾亮。皆

深造有得勝於用光。惜異之今年秋病歿矣。葛君則年齒甚壯、精進未可量。）」といい、弟子のなかで特に管同と梅曾亮を挙げている。すでに管同は世を去ったことから、彼は姚門の将来を梅曾亮に委ねたのである。また、吳德旋「皇清誥授資政大夫禮部左侍郎陳公神道碑銘」（『太乙舟文集』卷首）は、梅曾亮を陳用光の「年家子」であったとする。「年家子」は、陳用光の合格がその父と同年であることによる関係である。その父と同輩でありながら、彼はへりくだり梅曾亮と対等な関係を結んだ。これは、弟子同士の関係は世間の常識と必ずしも一致しないことを示している。その後、姚鼐や陳用光の期待に応えるように、梅曾亮は道光二年（一八二二）に進士及第を果たす。そして、戸部郎中として、京師文壇の領袖となり、桐城派の拡大に大きな貢献をしたのである。

最後に四傑同士の交遊を見ておく。劉開を除いた三人は、鍾山書院の第二期に久しく師の側らで学んだ。そのことは、方東樹が「送毛生甫序」（『攻弊集文録』卷八）で管同や梅曾亮との交遊に言及するのはじめ、管同「送姚石甫序」（『因寄軒文集』卷五）や梅曾亮「贈陳仰韓序（戊寅）」（『柏楸山房文集』卷三）などにも、三人の親しさを見ることができるといえる。ただし、劉開は、管同や梅曾亮とほとんど交遊が確認できない。管同は「劉明東詩文集序」（『因寄軒文集』卷四）において、劉開と一度面識があるものの、その後は死ぬまで会えなかったという。梅曾亮もその子に依頼されて、劉開の妻に「倪孺人墓誌銘（癸卯）」（『柏楸山房文集』卷十三）を執筆するものの、劉開との交遊には言及しない。劉開は生涯の多くを他郷で暮らし、ついには亳州で客死する。そのため、同郷の弟子以外とは交流する機会がほとんどなかった。このように、同門でも、面識がないまま終わることもある。ただし、面識はなくとも、姚鼐や陳用光を介して、その評判を知り、優れた弟子同士は、同門意識を強く抱くようになっていく。だからこ

そ、管同と梅曾亮は彼のために作品を執筆したのである。このように、姚鼐と陳用光の評価を介して、姚門の弟子は結束を強めていくのである。

ここまで四傑について見てきた。彼らはいずれも姚鼐と陳用光から高く評価されている。多くの弟子のなかで、この四人への賞賛は特別である。だからこそ、姚鼐は彼らを四傑として称揚し、陳用光に次ぐ姚門の代表と見なしたのである。

#### 四、陳兆麒と姚門

陳兆麒については、『桐城文學淵源考』が、その字と籍貫、著作を伝えるものの、それ以後は注目されることはなかった。しかし、彼は姚鼐や主な弟子と親しく交わり、姚門の中心近くに位置していた。本章では、彼と姚鼐師弟の交遊を論じ、姚門の具体的な文学活動を見ていくことにする。

陳兆麒は若いころ休寧を出て、鍾山書院で盧文弨や毛藻から八股文を学んだ。姚鼐が鍾山書院に赴任すると、そのまま入門しており、陳用光や四傑よりも入門が早い。「陳仰韓時文序」(『惜抱軒文集』巻四)において、姚鼐は「休寧の陳生仰韓、余に江寧に見え、惟だ余言へば之れ聴く。其の文を爲るに體和やかにして正しく、色華やかにして靡かれず、以て自立するに足り、以て時に應ずるに足る者なり。然るに生余に従ひて遊ぶこと十二年なり。而れども猶ほ場屋に困しむ(休寧陳生仰韓、見余於江寧、惟余言之聽。其爲文體和而正、色華而不靡、足以自立、足以應時者也。然生從余遊十二年矣。而猶困於場屋)。」といい、その文章が優れるのに、科挙に及第できないことを惜しんでいる。姚鼐はその不運を嘆くことで、弟子への気遣いを示したのである。ここでは、陳兆麒が十二年もつき従ったといっており、これは鍾山書院の第一期ほぼすべてに当たる。入門以来、彼は師の側らで学び続け、

このときすでに姚鼐から古参の弟子と見なされていたことがわかるのである。

陳兆麒は、その後も姚鼐の近くに暮らした。「姚庚甫詩文序」(『蘭軒文集』巻四)に「余 先生に従ふこと最も久しく、庚甫を知ること亦た最も深し(余從先生最久、知庚甫亦最深)。」というように、姚鼐の子の姚景衡とも深い交わりを結んだ。さらに姚鼐親子の近くで、多くの弟子とも交わるようになった。「贈楊褐裘序」(『蘭軒文集』巻七)で「古きを學ぶことの志既に決し、友を求むるの道斯こに勤む。乃ち上元に於いては管君、胡君を得て、桐城に於いては方君を得て、江寧に於いては周君を得。又た管君に困りて梅君、侯君を得れば、凡そ五六人なり(學古之志既決、求友之道斯勤。乃於上元而得管君、胡君、於桐城而得方君、於江寧而得周君。又因管君而得梅君、侯君、凡五六人焉)。」というように、楊培錦のほか、姚門では管同、胡鎬、方東樹、周鴻覃、梅曾亮、侯敦復と親しく交わった。管同と梅曾亮の名があることから、第二期の交遊を含んだ言及であることがわかる。このように、彼は第一期、第二期を通じて、鍾山書院で学び、姚門の中心近くに続けたのである。

彼の著作には『國朝古文所見集』と『蘭軒文集』がある。『國朝古文所見集』は清朝古文の総集であるが、「所見」の名が示すとおり、目録した作品に限定しており、自作九篇を含めて、姚門の作品を多く収録する。一方、『蘭軒文集』は巻首に、姚景衡、方東樹、陳用光、胡鎬、管同、梅曾亮、侯敦復の序を収録し、その作品には姚鼐師弟が多く批評を加えている。彼の著作を分析することで、姚門の文学活動を知ることができる。そこで、以下に『蘭軒文集』に批評がある人物に限定して、『國朝古文所見集』の収録作品を列挙してみる。

	『蘭軒文集』	『國朝古文所見集』
姚 鼐	六条	十三篇
管同	三十八条	十一篇
梅曾亮	二十八条	六篇
胡 鎬	二十六条	三篇
姚景衡	二十四条	一篇
侯敦復	十六条	三篇
俞廷颺	九条	無し
陳用光	七条	二篇
周鴻覃	六条	二篇
楊培錦	六条	一篇
方東樹	三条	四篇
張 翼	三条	一篇
甘 煦	三条	一篇
毛 藻	二条	無し
黃以旂	一条	無し
汪薰亭	一条	無し <sup>十三</sup>

『國朝古文所見集』の収録作品は、姚鼐の十三篇、管同の十一篇が突出している。ここに見えない作者では、方苞の十四篇、劉大櫟と吳定の十一篇も多い。陳兆麒は「跋紫石泉山房文集後」〔『蘭軒文集』卷五〕で、吳定が姚鼐と道義の交わりを結んだといい、彼を師の友人であり姚門の同調者と見なしている。姚門の収録作品では、管同が最も多く、梅曾亮の六篇、方東樹の四篇がそれに次ぐ。さらに、胡鎬と侯敦復も三篇が、陳用光、周鴻覃も二篇が収録されている。姚門以外では、朱仕琇、王芑孫、邵長蘅の四篇が最多であり、上位は方苞、劉大櫟、姚鼐および姚門とその周辺で独占している。ここから、古文の正

統は、桐城三祖によって継承され、姚門周辺に伝えられたと見なしたことがわかる。『國朝古文所見集』は、姚門重視の方針で編集されており、陳兆麒の清朝古文觀を反映しているのである。

収録作品に関しては、陳用光が比較的少ない。前出「贈楊褐裘序」〔『蘭軒文集』卷七〕にもその名は見えず、ふたりの交流が薄かったことが原因と考えられる。また、劉開の名がないが、「贈桐城方植之序」〔『蘭軒文集』卷七〕において、陳兆麒は彼と面識がないといっており、ほとんど接点がなかった。このふたりとの関係からは、『國朝古文所見集』が陳兆麒との親疎を反映していることが読みとれるのである。

『蘭軒文集』の序や批評からも、陳兆麒の交遊は明らかにできる。例えば、姚鼐六条、姚景衡二十四条の批評には、姚鼐親子との近さが示されている。弟子のなかでは、管同と最も親密であり、その古文を姚門第一と見なしていた。「因寄軒文集序」〔『蘭軒文集』卷四〕において、陳兆麒は「管君異之、年 余より少き<sup>わか</sup>ことは二十なり。而れども其の古文を爲ること、顧<sup>か</sup>つて余より多し。弱冠の時に當り、姫傳先師、已に其の能く人の頭地を出づることを決すれば、矧んや又た加ふるに二十年の功を以てせんや（管君異之、年少於余者二十。而其爲古文、顧多於余。當弱冠時、姫傳先師、已決其能出人頭地、矧又加以二十年之功耶）」といい、師から認められた古文が、二十年の精進によって、一層上達したことを賞賛している。管同もまた「陳仰韓生壙銘」〔『因寄軒文二集』卷六〕において、陳兆麒は讀書と農耕に没頭し、彼の家では元旦の早朝から讀書の聲が聞こえた体験を記している。ここから彼らはともに姚鼐に長く仕え、近くに暮らしていたことがわかる。ふたりの生活は接点が多いため、密接な文学的交流が生まれている。管同の批評三十八条は、陳兆麒が彼に作品の評価をたびたび求めた結果だといえるのである。

陳兆麒は、管同の仲介により、梅曾亮と交わるようになった。「贈



梅伯言序」(『蘭軒文集』巻七)において、彼は梅曾亮が幼年から文名が高く、名士から尊重されたという。ここから、ふたりに久しく文学的交流があったことがわかる。一方、梅曾亮の『蘭軒文集』序では、陳兆麒の古文について「年益ます加ふるに及んで、而れども志益ます鋭く、學益ます成る。議論敘述、粹然として正しきより出で、彬彬然として皆な觀るべきなり(及年益加、而志益銳、學益成。議論敘述、粹然出於正、彬彬然皆可觀也。)」といい、陳兆麒が年を重ねても、學問への志向が衰えず、學業が成就したとほめたたえる。ともに相手の年齢に言及するのは、ふたりが二十六歳も離れているからである。ただし、梅曾亮の批評二十八条が示すように、ふたりの文学的交流は、年齢差を意識させなかった。ここでも、姚門では年齢差をこえて、弟子同士が切磋琢磨し、たがいの作品を批評したことが示されているのである。

上元出身のふたりに比べ、方東樹との文学的交流は、薄かったようである。前出「贈桐城方植之序」には「桐城の方君植之、余と相ひ接すること年有り。而れども未だ嘗て一たびも其の古文を讀まざるも、見る者多く盛んに稱す。之れを觀るを得るに及んで、果して衆より異なれり(桐城方君植之、與余相接有年矣。而未嘗一讀其古文、見者多盛稱焉。及得觀之、果異於衆。)」とあり、方東樹とのつきあいは、長年にわたるにも関わらず、作品を見るのはかなり遅れたことがうかがわれる。同門でありながら、いつも文学的交流がともなうとは限らない例である。文学的交流の薄さは、『蘭軒文集』に収録される批評の少なさにも表れている。一方で、『國朝古文所見集』には、その作品四篇を収録している。これは管同や梅曾亮に次ぐ。目にする機会は少ないものの、彼は方東樹の作品に高い評価を与えたのである。

陳兆麒からの依頼を受け、陳用光は『蘭軒文集』に序を寄せている。序を依頼したのは、陳兆麒が彼を姚門の後継者として尊重したからで

ある。序では、自らを「同門宗弟」と称して、貢生の陳兆麒と社会的地位は隔絶しているものの、最古参の弟子への敬意を示している。ただし、彼は陳兆麒の作品十数篇を受けとるが、三年後によく自ら見解を送り返したという。ふたりは鍾山書院とともに学んだこともあっただろうが、陳用光が鍾山書院を離れると、次第に疎遠になっていった。ここには、ふたりが別々の道を歩んで、文学的交流も薄くなってしまったことが示されている。序の最後では「余ら兩人皆な衰ふるに就くを念ふも、而れども仰韓獨り自ら力めて以て先生の業を究むれば、余媿ずると雖も敢へて勉めざるえざるなり(念余兩人皆就衰、而仰韓獨自力以究先生之業、余雖媿而不敢不勉也。)」という。陳兆麒が老いてなお學問への精進を怠らないと称揚する一方で、自分は師の教えを継承できないことを反省している。このように関係が疎遠になっても、彼は依然として陳兆麒に同門意識を示し、ともに師の教えを継承することを願ったのである。

本章では、陳兆麒と主な弟子との関係を論じてきた。『蘭軒文集』の批評は、ほかの弟子との親疎を反映している。彼は江南に住む弟子とは、密接な関係を維持している。例えば、管同や梅曾亮に対しては、批評を何度も求め、その親密さがうかがえる。一方、方東樹との文学的交流はやや薄く、陳用光とは書簡を通じたやりとりだけになってしまった。そもそも劉開のように、面識のない弟子もいる。これまで、姚門の具体的な交遊を検証せずに、文壇への影響だけが論じられてきた。陳兆麒に注目することで、弟子同士がどんな結びつきだったか、その具体的な姿が明らかになるのである。

##### 五、姚門における文学主張

これまでの研究では、姚門における文学主張として、「義理」「考證」「詞章」の学問三端説の継承などに注目したが、その具体的な継承に

なると、現在もはっきりしていない。『蘭軒文集』の批評は、姚鼐師弟の文学的交流の痕跡である。そこで批評の分析を通して、姚門における文学主張の継承を論じてみる。

まず、陳兆麒の文学主張を見ておく。「上舅氏汪息園先生書」（『蘭軒文集』巻六）において、彼は師友から「理」「法」「辭」「氣」を学んだという。その内容は「理は精醇を貴び、法は周密を期し、辭は以て其の意を達するに足りて、氣は以て辭を主<sup>かま</sup>るに足るのみ。（理貴乎精醇、法期于周密、辭足以達其意、而氣足以主乎辭而已）」というものであり、八股文の執筆において、精純な理、周密な法、達意の言辭、言辭を司る氣を重視した。これは、古文にも通じる主張でもある。

この主張には、師からの影響が見られる。「古文辭類纂序目」（『古文辭類纂』巻首）において、姚鼐は「凡そ文の體類十三にして文を爲<sup>つく</sup>る所以の者は八つあり。曰く神、理、氣、味、格、律、聲、色なり」と。神理氣味なる者は、文の精なり。格律聲色なる者は、文の粗なり（凡文之體類十三而所以爲文者八。曰神、理、氣、味、格、律、聲、色。神理氣味者、文之精也。格律聲色者、文之粗也。）という視点を提起する。両者を比較すると、「文之精」のうち、陳兆麒の「理」は「神理」に当たり、「氣」は「氣味」に当たると考えられる。「古文辭類纂序目」には「法」と「辭」が見えないが、姚鼐がいう「文之粗」に含まれるだろうから、それぞれ「格律」と「聲色」に相当すると見なすことができる。このように、陳兆麒の「理」「法」「辭」「氣」は、姚鼐の主張と重なる部分が多い。『蘭軒文集』でも、弟子たちはこれらの視点から批評しており、姚鼐の主張が弟子に伝えられ、姚門のなかで共有されたことを示している。「上舅氏汪息園先生書」の文学主張も、陳兆麒が師の教えを受け継いだ一例を示しているのである。

以前、筆者は姚門における方苞の義法を論じたことがある。<sup>十五</sup> 陳兆麒もまた『蘭軒文集』自序において、師から受けた古文の法に言及する

が、ここでは周秦以来の文集を読み、義法によって検証したとする。ほかに、「寄姚彦容彦耿兩世兄書」（『蘭軒文集』巻六）では「疇昔に師承するの義法を取りて、而も三四の同志と偕<sup>とも</sup>にし、互ひに相ひ觀摩する者は、年有り（取疇昔師承之義法、而偕三四同志、互相觀摩者、有年矣）」として、彼は姚鼐から義法を学び、長年にわたってほかの弟子と義法を切磋琢磨したという。ここには、姚門における義法の具体的な受容過程が示されているのである。

方苞は「義」を作品内容とし、「法」を叙述方法とする。『蘭軒文集』の批評にも、この影響は見られる。義法の定義として、方苞は『周易』の「言有物」「言有序」の表現を用いるが、「家偉卿六兄六十壽序」（『蘭軒文集』巻八）評では、周鴻覃も「言に皆な物有り、道と大ひに適ふ（言皆有物、與道大適）」といい、「言有物」を用いている。これは、明らかに義法を意識した表現である。ほかに、「題青溪艸堂著書圖」（『蘭軒文集』巻五）評で「辭意と適ふ（辭與意適）」といい、「王孝子傳」（『蘭軒文集』巻九）評でも「辭義と適ふ（辭與義適）」といっている。これらの批評は作品内容にふさわしい叙述方法であることを評価しており、義法に通じる評価基準である。このように、『蘭軒文集』の批評にも、姚門における義法受容の一端が見受けられるのである。

次に批評を通して、師弟間の文学主張の継承を見ていく。『蘭軒文集』には、姚鼐の批評六条を収録する。そのひとつ「支譜序」（『蘭軒文集』巻四）評は「布局 法に合ひ、詞を措くこと簡明たり（布局合法、措詞簡明）」という。ここでは構成が古文の法に合致し、詞句の選択も簡潔明白であることを評価している。管同も「朱仲亭詩集序」（『蘭軒文集』巻四）評において「辭を措くこと體を得（措辭得體）」<sup>十六</sup> といっており、姚鼐と同じ「措詞（辭）」という表現を用いている。ほかに「妻黃氏六十壽序」（『蘭軒文集』巻八）評では、侯敦復が

「辭を措くこと度に合ひ、紀律秩如たり(措辭合度、紀律秩如)。」と  
 いており、詞句の選択が基準にふさわしいことを評価している。こ  
 の「措詞(辭)」のように、師弟には共通する表現が多く見られ、文  
 学批評において、弟子たちが姚鼐から影響を受けたことをうかがうこ  
 とができるのである。

姚鼐師弟の継承関係は、「斷制」という表現において、最も顕著に  
 示される。「斷制」は、作品の構成に関する主張であり、「裁制」や  
 「斬截」ともいう。姚鼐は「與陳碩士」(『惜抱先生尺牘』巻六 二十  
 六葉表)で「必ず簡峻なるを欲すれば、更に荆公の爲る所を讀むに若  
 く莫ければ、則ち筆間に自ら裁制有り。敘事の文、繁冗の累する所と  
 爲れば、則ち氣 流行自在たること能はず。此れ知らざるべからざる  
 なり(必欲簡峻、莫若更讀荆公所爲、則筆間自有裁制矣。敘事之文、  
 爲繁冗所累、則氣不能流行自在、此不可不知也)。」といい、簡潔な古  
 文を執筆しようとすれば、王安石に学ぶことで「裁制」を獲得できる  
 とする。古文を執筆する際に、姚鼐がどの部分を叙述し、どの部分を  
 裁断して省略するかを重視していたかがわかる。こうした主張は、弟  
 子にも受け継がれている。例えば、「孝婦王淑卿傳」(『蘭軒文集』巻  
 九)評では、姚景衡も「筆に裁制有り。故に敘事詳備し、而も蕪れず  
 (筆有裁制、故敘事詳備、而不蕪)。」として、作品に裁断を加え、省  
 略部分があるからこそ、叙述が乱れることなく、その内容がつぶさに  
 備わると評価する。このように、省略により作品に緊張を持たせるこ  
 とは、姚門では重要な評価基準となっていたのである。

姚鼐は「泰伯讓天下論」(『蘭軒文集』巻一)評においても「時勢に  
 按じて以て言を立て、翻駁して情を盡くし、斷制に力有り(按時勢以  
 立言、翻駁盡情、斷制有力)。」といい、叙述が委曲を尽くすことを評  
 価する一方で、陳兆麒の大胆な省略を「斷制有力」を用いて賞賛して  
 いる。これに類似する表現は、弟子もまた用いている。例えば、「子

家羈論」(『蘭軒文集』巻一)評において、侯敦復は「一たび結べば餘  
 味深長たり。斷制の處亦た筆力を見ず(一結餘味深長。斷制處亦見筆  
 力)。」という。ここでは、省略によって執筆能力を発揮できたと評価  
 するが、師と同じように「斷制」を「力」とともに用いている。ここ  
 から、侯敦復が師の主張から影響を受けたことがうかがわれるのであ  
 る。

姚門の「斷制」は、作品をぎりぎりまで厳しく裁断することを求め  
 ていた。例えば、梅曾亮は「項伯論」(『蘭軒文集』巻一)評において  
 「斷制老辣たりて、諸論當に此れを以て第一と爲すべし(斷制老辣、  
 諸論當以此爲第一)。」といい、作品の省略が熟達して大胆に裁断する  
 からこそ、論として最も優れると賞賛している。ほかにも、「魏武殺  
 荀彧論」(『蘭軒文集』巻二)評では、胡鎬が「斷制森嚴なれば、魏の  
 操心の迹を洞見す(斷制森嚴、洞見魏操心迹)。」といい、作品を厳し  
 く裁断することで、曹操の意図が見通せるといっている。このように、  
 姚門では「斷制」をくりかえし用いており、姚鼐師弟がいかに簡潔な  
 古文を求めていたかが、批評からわかるのである。

これまでの研究では、姚鼐師弟の作品から、彼らの文学主張を読み  
 とってきた。この場合、個人の主張は明らかにできても、師弟の影響  
 関係は明らかにしにくい。本章では、『蘭軒文集』の批評から、姚門  
 が共有する文学主張を論じてきた。もちろん批評は断片的なため、そ  
 こから読みとれる主張もわずかに過ぎない。一方で、多数の批評は、  
 集団としての文学主張に一定の傾向を示している。今回は主に「斷制」  
 に注目して論じたが、弟子もまた師に類似した視点や表現を用いたこ  
 とから、彼らが師の教えを継承したことがわかるのである。

#### おわりに

本稿では、姚鼐師弟の交遊から、姚門の結びつきを見てきた。文学

集団の性格を考察することで、なぜ姚門が大きな影響力を持ったか明らかにするためである。姚門では、姚鼐だけでなく、後継者である陳用光も、その中心的役割を担っている。さらに、栄達を果たした彼は、社会的影響力も有しており、ほかの弟子もその推挽を得ることで、姚門は文壇における地位を確かなものとしたのである。

これまで、弟子のなかでは四傑が代表とされてきた。この呼称は姚瑩によって提唱されたが、その根拠となるのは、姚鼐や陳用光からの評価である。特に姚鼐が賞賛することで、四人はほかの弟子からも一目置かれるようになった。姚鼐の死後は、陳用光がその役割を引き継ぎ、彼らに対して便宜を図っている。その結果、彼らは姚門でさらに尊重されたのである。同門といっても、姚鼐の活動期間は長いため、弟子同士必ずしも面識があるわけではない。それでも、彼らが同門意識を抱き続けたのは、陳用光という後継者がいたからである。彼が指導力を発揮することで、師の死後も、姚門は長く文学集団として結束を維持できたのである。

陳兆麒の場合、鍾山書院最古参の弟子であるにも関わらず、その名は姚門のなかだけで知られていた。しかし、彼の著作からは、姚門の文学活動をうかがうことができる。『國朝古文所見集』は、姚門の基準で作品を選んでおり、彼らが清朝古文をどう評価したかを伝えている。また、『蘭軒文集』の一百八十条ほどの批評は、姚門の文学主張を伝えるだけでなく、陳兆麒との親疎を示している。彼に注目することで、姚門の多彩な人間関係が明らかにできるのである。

当時から、姚門の重要性は認知されていたにも関わらず、文学集団としての評価は、これまで具体性を欠いていた。そこで、本稿では、個人の文学主張を論じるだけでなく、文学集団としての傾向を明らかにすることをめざした。「斷制」という表現に見られるように、姚門の人々は、たがいに批評を加えることで、集団内で文学主張を共有す

るようになったのである。

#### 【注】

一 鍾山書院の滞在時期については、楊布生「姚鼐從事書院教育40年考略」(『益陽師專學報』第十二卷第三期、一九九一年)が、第一期を乾隆五十一年(一七八六)の赴任とし、第二期を嘉慶十一年(一八〇六)の赴任とするなど、研究者によって若干の違いがある。

二 姜書閣『桐城文派評述』(商務印書館、一九三〇年)第四章は、弟子のなかでも特に梅曾亮、方東樹、陳用光、吳德旋、姚瑩を取りあげる。桐城派の専著として、葉龍『桐城派文學史』(香港龍門書店、一九七五年)第五章、王獻永『桐城文派』(中華書局、一九九二年)第二章、金慶國『桐城派姚門五大弟子研究』(當代中國出版社、二〇〇三年)などがあるが、ほぼ方東樹、劉開、管同、梅曾亮、姚瑩らを重要な弟子として取りあげている。

三 今回は中國國家圖書館所蔵の『蘭軒文集』十卷(休寧韓氏嘉慶二十四年刊、道光四年補刻)を用いた。

四 「陳石士閣學、詩文醇雅、得惜翁正傳。然閣學殊推上元管異之同、比諸六祖、而自居秀上座。余謂若吾桐方植之東樹、劉孟塗開、上元梅伯言曾亮及異之、皆惜翁高足、可稱四傑。未知閣學謂何如也。」

五 前出「歐陽生文集序」でも、曾國藩は陳用光を取りあげるが、江西への伝播に果たした役割だけに言及する。論考としては、柳春蕊『晚清古文研究以陳用光、梅曾亮、曾國藩、吳汝綸四大古文圈子爲中心』(百花洲文藝出版社、二〇〇七年)第一章をはじめ、李陽陽、徐國華「江西桐城派傳衍考述」(『南昌航空大學學報(社會科學版)』第十七卷第二期、二〇一五年)、同「桐城派新城作家群生平及著述考略」(『東華理工大學學報(社會科學版)』第三十四卷第一期、二〇一五年)などあるが、いずれも江西への伝播が関心の中心となっている。王達敏「姚鼐與乾嘉學派」(學苑出版社、二〇〇七年)第八章には、姚門における中心的役割にも言及がある。

六『惜抱先生尺牘』は、同一人物に複数の書簡があるため、葉数を記載する。  
七「顧管念先生之所期於用光者、學以致夫道。自古師弟子之相授受、固貴乎親炙。而其傳之能習與否、必視其人之自力。苟終日侍側、而志氣不從、則如其未待焉爾已。用光曩者在江寧時是也。苟千里阻隔、而服膺師說而弗懈、則如其日待焉爾已。而用光今者乃不能」

八「上元管同、能古文、爲姚郎中高第弟子、久落解。及公典試江南、而同中式。宜興吳德旋、嘗受古文法於姚郎中、而其文憊然有以自成、既老矣。公延之入浙江學使幕、與商訂所作。或有所塗乙、乃益歡。居京師、後進小生、以文藝就質、必褒意而誘進之。或游揚於衆不容口。客至、賦詩奕棋對談、常竟日不倦。」

九 姚瑩については、拙稿「姚瑩における桐城派への所属意識について」(『金城学院大学論集(人文科学編)』第十二号第一号、二〇一五年)において、彼が鍾山書院に滞在した期間が短いため、書簡を通じた教えが主であったことを明らかにした。そこで、本稿では彼については、取りあげない。

十 管見の限りでは、姚鼐は陳用光にあてて、十二通のなかで方東樹に言及している。また六通のなかで劉開に言及している。

十一「曩者、惜抱先生亟稱足下之才、用光蓄願見之思者、十年于茲矣。兩過江寧、皆不相值。今夏、劉明東來此、應順天試。意明東舉于北、而足下舉于南、固人間可喜事乎。」

十二 方東樹の序は『攷槃集文録』巻八に「贈陳仰韓序」として、陳用光の序は『太乙舟文集』巻六に「家仰韓兄文集序」として収録されている。

十三 最後の汪薰亭は不明。俞廷颺は陳兆麒を慕う後進であり、『蘭軒文集』に跋文を寄せる。彼の批評は『蘭軒文集』編集時に加えられたと考えられる。毛藻は、陳兆麒が師事したころの批評と見られる。それ以外は、姚門の中心に位置する人物である。

十四 以下にいくつか例を挙げておく(傍線は引用者による)。管同「寄朱仲亭書」(『蘭軒文集』巻六)評では「文は理を精らかにするに足り、結筆尤

も峭きわ(文足理精、結筆尤峭)。」といい、梅曾亮「甘節婦墓表」(『蘭軒文集』巻八)評では「氣足り神酣しんかんなり(氣足神酣)。」といい、楊培錦「五先生傳略併贊」(『蘭軒文集』巻九)評では「胎息氣味、直ちに史公に逼るも、而れども文格絶えて相ひ似ざるは、蓋し其の神髓を得るなり(胎息氣味、直逼史公、而文格絶不相似、蓋得其神髓也)。」という。批評ではないが、陳兆麒も前出「因寄軒文集序」で「夫れ文至れば、氣體聲色、其の妙備はる(夫文至、氣體聲色、其妙備矣)。」という。いずれも「古文辭類纂序目」の批評概念に通ずる表現を用いている。

十五 拙稿「姚門における八股文の評価」(『金城学院大学論集』人文科学編第六巻一、二〇〇九年)では、姚鼐は義法の限界を認識していたが、その弟子は多く義法に言及していたことを明らかにした。